

命がけのウイリーの夜這い

1 ある日の美しい夕時に外に出てみると

娘が泣きながらたずねてきました
「わたしの父と母を見かけませんか

兄のジョンを見かけませんか
この世で一番愛する恋人を見かけませんか
その人の名はウイリアム」

「お父さんもお母さんも見かけません

お兄さんのジョンも見かけません
あなたがこの世で一番愛する恋人は見かけました
たしかに その人の名はウイリアム」

「馬に乗って それとも駆けて

それとも ひとりで歩いていましたか
今晚こちらに来ると言つていましたか
ああ どうしてこんなに遅いのでしょうか」

「馬に乗っても 駆けてもいません

ただひとり 足早に歩いていましたよ
今晚あなたのところに行くから
ああ どうしてこんなに遅いのでしょうか」

「馬に乗つても 駆けてもいません

起きているのかい 起きているのかい

さあ立つて お前の恋人を中に入れてくれ

「ウイリーは恋人の戸口にやつて来て
そつと掛け金をはずしました
「メギー 寝ているのかい 起きているのかい
さあ立つて お前の恋人を中に入れてくれ」

娘はすばやく戸口に駆けてゆき

そつと掛け金をはずしました
それから 長い両腕をいっぱい広げ

恋人を抱き締めて 中に入れました

「トランプしますか ダイスしますか

それとも 坐つてワインを飲みますか
それとも キレイな毛布をかけた

ベッドにまつすぐ行きますか」

「トランプはしない ダイスもしない

坐つてワインも飲まない
きれいな毛布をかけた

ベッドにまつすぐ進みたい」

「屋根にとまっているわたしの雄鶏
夜が明けるまで啼かないで

そうすればお前の鶏冠とさかはきらきらのゴールドに
羽はシルバーグレーに変えてあげますよ」

おんどうり
雄鶏は娘を裏切つて

一時間早く啼きました

人々は朝日が昇つたと思いましたが
それはただの月明かりの間違いでした

「ああ」とメギーは悲しく言いました

「二人ともすっかり寝過ごしたのね」

「心配することはない」とウイリーは言いました

「その分 急いで戻ればいいさ」

ウイリーは起きて 服を着て

靴下と靴も引き寄せて

脇には褐色の剣を差し

丘を越えて 消えてゆきました

ウイリーが高い高い丘を越え

さびしい谷をくだつてゆくと

悲し気な巨人の亡靈に出会いました

一万人をも恐れさす 巨人の亡靈でした

ウイリーがメアリ教会に入つてゆき

教会墓地の入口を入れつてゆくと

青白く悲し気な亡靈が

ウイリーにつっこり微笑みました

「ウイリー お前はこの道を何度も通り

罪を犯して何度も通りながら

神様に 無事に戻してくださるようにと

祈つたことなど一度も無い

「ウイリー お前はこの道を何度も通り

お前のかわいい恋人に会いにいったな

もう一度と ここを通ることは無い

かわりに 形見を残してゆくのだ」

亡靈はウイリーをつかまえて

身体を千々に引き裂いて
教会の座席の一つ一つに

ウイリーの肢体を分けて掛けました

メギーの席には

ウイリーの頭と金髪を掛けました

ウイリーの父も母も悲しました

メギーはもつと悲しみました

ウイリーの父も母も悲しました

メギーは金髪を搔きむしって悲しみました

(山中光義訳)